

## 体を通す

2022・1・6 重枝 一郎

先生方、新年あけましておめでとうございます。今年もよろしくお祈りします。

3年生は、受験において「面接」がある。その際、「将来の夢は？」と問われる。どれくらいの生徒がそれを具体的に語るができるのだろうか。私自身がその年代でそれを語ることができていたか……。昨年まで、高校入試の面接練習をしていたが、生徒が夢を語っていると大人はそれを聞いて安心し、生徒はその大人の態度を見て安心している気がする。入試の「面接」では、それは契約のようなもので、重要であることは変わらない。しかし、本当のところはどうだろう。

生徒は、実はそんな先のことは考えていなくて、生徒にとっては毎日充実していることが重要であり、「今、ここで自分がどうしたいか」「今、ベストを尽くせることは何で、そのためにどうすればよいか」ということを瞬間、瞬間ふりかえっているかが、もっとも大切なことになるのではないかと私は思っている。これが“Being”であり、それが“青春”である。そして、先の人生において、その一瞬が永遠に残り、困難を乗り越える「知恵」になる。

学校や学級は一つの小さな社会である。それなら生徒に「今、この社会をどうすればみんなが居心地よく過ごせるか」を考え抜かせてほしい。これは、生徒にとって手の届く範囲のことである。今いる場所を自分にも相手にも居心地よくしていく。そして、そのことは、自分と違う誰かとどんな関係をつくっていくかという原体験になり、大人になって生きてくる。だから、ミッションプライドは「大切なひとり」であり、「自分よし、相手よし、みんなよし」なのである。

とにかく人は体験し、徹底的に振り返ることではしか成長できない。

これを私は、『体を通す』と表現する。

生徒には「やってみたい」「成長したい」という欲求が必ずある。それは『体を通して』自分事にしないと成果にはつながらないし、将来にもつながらない。それを実感して、生徒のマインドが変わっていく。もちろん失敗もする。できた気になっていても失敗するときもある。しかし、失敗するのがよかったりもする。できると思っていたのに失敗したときの悔しさ、不甲斐なさを感じないと、次に本気でやらない（ブチ挫折）。

よく学校では、生徒たちはどんな学級にしていこうかという“ゴール”をイメージさせる。それが手の届く範囲なので当然の取組だろうが、「いい学級になる」ことを“ゴール”にするということは、もしかすると学校というスパンで考えると違うのではないかと思う。しかし、「みんなが成長できる学校になる」ということは共通のゴールにすることができる。つまり「いい学級」とは、そのためにあるもののはずである。「いい学校」のために学級でできることは何だろうと“ゴール”をつくっていくことが大切である。ここまでが手の届く範囲として考えるようになると次に「ミッションプライド」につながると思う。どんな場所でどんな状態になっていけば、私たちは「いい学校になった」と言えるのか、その“ゴール”を目指して、この3学期、いわゆる次の学年への0学期としての生徒の具体的な行動に期待している。

さあ、新たなミッションの開幕である。